

漢詩文は琉球王国の文化力の象徴である

上 里 賢 一

(琉球大学名誉教授)

琉球漢詩文という研究分野が、琉球文学の一つのジャンルとして確立したのは、最近のことである。見方によっては、現在まさに確立に向けて成長の途上にあるとも言える。どのような形と内容のものに結実するか、今後の進展が楽しみである。本プロジェクトのジャンルの一つとして位置づけてもらったのは、琉球漢詩文を琉球文学の不動の分野として、広く認められるようにする良い機会だと理解している。そのために微力を尽くしたい。

琉球王国は、中国(明・清)との朝貢関係を基調にして、東アジア諸国との交易を国家経営の基軸にしていた。文化的にも東アジア漢字文化圏の一員として国際的な位置を占め、特色ある成果を残した。漢詩文はその一つである。漢詩文は、かつて琉球王国時代には、役人や知識階級の基本的な教養であった。進貢使節として、中国に派遣される首里や久米村の役人にとっては、中国の役人との宴席などでの交流のツールであり、外交交渉を円滑に進めるうえでも大切なものであった。

程順則(名護親方寵文)が編纂した琉球最初の漢詩文集である『中山詩文集』は、琉球の文化的位置を誇示したものである。薩摩支配下で難しい国家運営を強いられながら、如何にして琉球の独自性を維持するか、程順則は薩摩の対中国貿易政策をうまく利用して、琉球における儒学の強化を図った。明倫堂の創建と孔子廟碑文の製作、「廟学紀略」の執筆には、程順則の強い決意が表れている。

孔子廟と明倫堂は、儒学の拠点として両者一体の施設である。琉球における孔子廟の創建は、中国との正式な交流の始まった1372年(洪武5年)から、やがて300年になろう

とする1674年(康熙13年)である。明倫堂はそれより44年おくれて1718年(康熙57年)創建である。この状況をどう見るか、ここでは述べる余裕はない。ただ、いずれも薩摩支配下であり、薩摩入り以前の琉球の儒学は、必ずしも隆盛していたとは言えない。

尚敬王の冊封副使として1719年(康熙58年)に渡来した徐葆光は、その使録である『中山伝信録』と詩集『奉使琉球詩』で知られている。明倫堂は程順則の提言によって、徐葆光の渡来の前年に創建された。程順則の孔子廟の碑文(琉球国新建至聖廟記)はその3年前(1716年)に書かれている。国家の盛典である冊封を意識した、綿密な取り組みであったことが読み取れる。「廟学紀略」は、1706年(康熙45年)に書かれ、翌年曲阜の孔子廟に献納されている。そこでは、明倫堂創建以前の天妃宮における教育が述べられており、程順則にとっては孔子廟と一体の学の施設としての明倫堂の建設は宿願であった。

孔子廟と明倫堂という儒学の拠点を整えた琉球は、東アジアにおける漢字文化の一員としての地位を見える形で内外に示した。『中山詩文集』には、孔子廟や明倫堂に関する程順則の一連の文章の他、徐葆光とその前の冊封使汪楫、林麟焜らの「新建至聖廟記」を収録している。「六論衍義」の伝来と普及に貢献した程順則は、薩摩支配下で儒学の振興を図り、琉球の独自性を開発し、琉球漢字文化の精髓を発揮せんとして『中山詩文集』を編んだ。この詩文集には、薩摩支配下での儒学による教育と文化の振興という、程順則の目指した文化国家建設の理想が凝縮されている。

和文学の編集に携わって

小 番 達

(名桜大学国際学群教授)

2019 年度から本学において琉球文学大系の編集刊行事業が始動した。全 35 巻 12 年に亘る事業が計画されていることを仄聞した当初、日本古典文学大系に代表される叢書に類する一大プロジェクトになるのであらうと他人事のように驚嘆していたが、それが他人事ではなくなってまた吃驚した。というのも、琉球文学に関しては全くの門外漢の私がこの事業の末席を汚すことになったからである。日本古典文学を専門としているものの、生来怠惰な性格で浅学菲才、果たしてお役に立てるのか甚だ心許ない思いがあった(それは今もあるのだが)。こうした不安を懐きつつ、本大系第 24 巻『琉球和文学・上』を担当するというので、本巻に収載する『思出草』の翻刻・注釈作業を 2019 年 9 月から同僚 4 名とともに着手した。

この『思出草』は識名盛命が著した作品で、元禄十二(1699)年に彼が年頭使として派遣された薩摩での体験に基づく紀行文である。まずその文章であるが、池宮正治「毛起竜(識名盛命)『思出草』一翻刻と注釈」(『日本東洋文化論集』8 2002 年 3 月)に「一読すれば判るように、古典語の語彙の豊富さ、表現の確かさ、旅先での当意即妙の筆致、その実力の程は誰にも看取できる。雅文を自家薬籠中のものにしてしているのである」(p.45)との指摘がある通り、熟達した和文となっており、後の国学者による擬古文にも通じるような書きぶりである。

本作品の内容は、薩摩国の藩士や文化人との交流、その交流の中で得られた歌書や手鑑との邂逅、そして、大隅正八幡宮・霧島神宮・慈眼寺などの社寺をはじめとする名所旧跡への訪問、吉野牧・福山牧での馬追いなどの見物の様子が景物やその情趣を織り込みながら詳細に叙述されている。

これは盛命の優れた表現力とともに人間や自然に対する深い洞察力・観察力、繊細な感性に由来するものと考えられる。

また、こうした見聞の折々に数多くの和歌が詠まれている。これも盛命の和歌に関する知識と才能に支えられてのものと言えるであらうが、『土佐日記』を淵源として中古・中世の時代を経て連綿と継承された紀行文(旅などの様子を記した紀行文という名称は近世に入ってから用いられ、それまでは日記の一種として認識されていたらしい)のもつ"型"を意識してのもののようにも思われる。

私がこの作品の中で興味をもったのが、盛命の望郷の念がそこここに表出している点である。例えば、ある人が「うるまゆり」(未詳。上述の池宮は、テッポウユリのことか、とする)を盛命のもとへ贈ってきた折、「げにや旅の習ひ、公私につけて、事とある時しもあれ、ともすれば故郷の方のみ心にかかりて」と述懐する。また、薩摩滞在中、亡き親、娘の年忌にあたったことに際して、滞りなく追善供養を行っているであらう故郷の人びとへ思いを馳せる文言が繰り返される。薩摩の文物に接する経験を満喫していると思われる盛命であっても故郷琉球への思いが常にその胸の裡にあったことがわかる。

私にとって琉球和文学の最初の出会いが『思出草』という作品になった。翻刻、とりわけ注釈を付ける作業は一筋縄ではゆかない。だが、この作業を通じて本作品の面白さを知ることができ、何より様々な知識を得ることができた。私自身の蒙を啓く機会を与えていただいたと思う。本作品の注釈作業を継続するとともに、また新たな和文学作品の編集に取り組んでいきたい。

2021年度 上半期業務報告

(4月～9月)

令和3年度第1回「琉球文学大系」全体会議（編集・執筆者会議）を開催

7月3日（土）、沖縄県市町村自治会館にて令和3年度第1回「琉球文学大系」全体会議（編集・執筆者会議）を開催しました。緊急事態宣言中のため開催延期も想定されましたが、本年度に第1巻刊行ということ、半数以上の委員が出席可能であることを確認できたことから感染対策を十分に行い予定どおり開催する運びとなりました。

当日は、学内・学外合わせて計14名の委員にご出席いただき、各担当巻の作業の進捗状況について報告がなされたほか、今後の刊行スケジュールについての確認が行われました。また、同意書についても説明がなされ、各執筆者に対して内容について確認の上、ご署名いただきました。



全体会議の様子＝3日、沖縄県市町村自治会館

元請け出版社の選定と交渉に着手

令和3年度の第1巻刊行に先立ち「琉球文学大系」（全35巻）の元請け出版社の選定と交渉が進行中です。現在、東京の出版社2社との交渉が進められており、印刷・製本費等も含め本の編集・校正等の事前交渉が行われています。交渉には、波照間委員長、照屋副委員長、渡具知編集局長、荻堂総務企画部長、喜瀬課長らが当たり、学長への報告会も適宜行われています。今後は、各社との調整および交渉を重ねたのち、最終的には「琉球文学大系」編集刊行事業（全35巻）の元請け企業と

の契約手続きについて、10月中旬に覚書締結を行い、11月中旬を目途に正式な本契約を行う予定です。

『おもしろさうし 上』原稿編集作業を瑞木書房（小林基裕氏）に業務委嘱

5月、第1巻『おもしろさうし 上』のスポット・アドバイザーとして原稿編集作業を瑞木書房に業務委嘱することが決定しました。

瑞木書房の小林氏は、『鎌倉芳太郎資料集』（I～IV）の編集経験を持ち、本事業刊行物における編集・校正等品質保証の強化が行われました。現在、『おもしろさうし 上』に収める巻十一までの再校ゲラの編集作業が鋭意進められています。また、令和4年度発刊予定の『おもしろさうし 下』『琉歌上』『組踊 上』についても引き続き編集していただく予定となっています。

次年度刊行予定の組踊班作業部会が本格始動

第14、15巻組踊班作業部会（計4名）が、令和4年度の刊行へ向けて本格的に動き出しています。今年度は5月から9月にかけて計5回の巻別会議を開催し、作業の分担や本文の体裁について具体的な話が進められています。組踊班作業部会は、これまでに詞章本文の執筆を概ね終えており、現在は、本文のヨミ・語注・解説等の執筆を急ピッチで行っています。今後は、元請け出版社が決まり次第、出版社を踏まえた組版の作成や本文の編集・校正作業に入る予定です。



組踊班巻別会議の様子＝9月、シナジールーム中城・南上原

北琉球のうた探訪—解釈と鑑賞 (4)

思ぬ病 (伝承地：大宜味村喜如嘉)

1. 思ぬ病しちよてい 寝なしする夜や
親ぬふりむぬや ゆたば頼でい

【訳】恋の病に陥って寝込んでいる夜は、(私のその思いを知らない) 馬鹿な親は (心配して) ユタを頼んでいるよ。

2. ゆた頼でい何すが 医者頼でい何すが
我が思るさとう前 見して給り

【訳】ユタを頼んで何になりましょうか、医者を頼んで何になりましょうか。私の好きな彼を見せて下さい。

3. 喜如嘉女童ぬ 織ゆる花織や
我が思るさとう前 振いる手巾

【訳】喜如嘉の乙女 (である私) が織る花織は、私の好きな彼が振る手巾です。

[喜如嘉誌編集委員会編『喜如嘉誌』1996年]

上記の歌は、大宜味村喜如嘉に伝わるウスデーク歌の一節。土の匂い香る恋の歌である。

1 節目は、好きな彼のことを想い寝込んでいる夜のこと、親は愛する娘の異変に思いをめぐらせユタに相談しているというもの。本気の恋こそ期待と不安は大きい。冒頭の「思ぬ病しちよてい 寝なしする夜や」は、好きな彼を想い幾晩も寝込むほど深刻であることを伝えている。続く「親のふりむぬや」は、恋煩いに苦しんでいる私のその思いを知らない親に対して娘が揶揄して言った言葉。フリムヌは多くの方言辞典では、狂い人と解され、山内盛憲の「南島八重垣」(1934年)に「神経病者なれども、今はひづりて、馬鹿らしき者にもしかいふ」とある。しかし、『奄美方言分類辞典』は、ある人を愛するあまり的確な評価ができず、愚かに思える行動をする「惚者」に語源を求めていて興味深い。ユタは霊的能力を持つ巫女のこと。

2 節目は、ユタに相談しても医者にも相談しても私の恋の病は治りません。好きな彼にどうか会わせて下さいと、恋に悩む娘の心情が詠まれている。沖縄には「医者半分、ユタ半分」という言葉があり、身体に不調をきたすと先ずは医者にかかり、それでも治らない場合はユタにかかる風習がある。だが、こうした風習もここでは効かない。医者もユタも太刀打ちできない病、それが恋なのである。

末節は、喜如嘉の乙女である私が誠意を込めて織った花織は私の好きな彼が振る手巾です、とうたって結ぶ。花織とは花柄の文様の入った織物のことで、近代まで恋する気持ちの証として恋人へ送る習俗があった。この節の背景には「伊舎堂森登て手巾持ち上げれば わが振たる手巾里が振ゆさ」(伊舎堂森に登って手巾を持ち上げると、私が振ったその手巾を愛しい彼が振るよ)の世界がある。

ちなみに、南琉球に位置する八重山では、赤マタ神・黒マタ神のことを思うと病まない腹も病み、心配した親はユタを頼んでいるよ。医者もユタも構うなよ、赤マタ神・黒マタ神をお招きして神遊びをしよう、とうたう。恋を巡る歌が神を巡る歌として伝わっている。(石川恵吉)

「琉球文学大系」新規関係委員の紹介

本事業の関係委員に、このほど平良徹也氏、山田浩世氏(沖縄県教育庁文化財史料編集班)が新たに加わりました。平良氏は第11、13巻『琉歌』(上・下)、山田氏は第28、29巻『琉球史史料』(1・2)を担当します。

事務局職員の人事異動—2021年4月

令和3年度の大学事務改組にともない本事務局は総務企画部地域連携研究推進課となりました。

【新規】地域連携研究推進課長 喜瀬直樹 事務局係員 比嘉緋南

各巻担当委員の皆様へ 令和3年度第2回全体会議(編集・執筆者会議)開催のお知らせ

令和3年度第2回全体会議(編集・執筆者会議)の開催は下記の日程を予定しています。日程調整のほど何卒宜しくお願ひ申し上げます。

開催日程：2021年12月17日(金)18:30～ 開催場所：浦添市産業振興センター・結の街